

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 ( 教育学 )	氏名	栗 原 知 恵
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
家庭科における自己調整を促す授業モデルの開発に関する研究			
論文審査担当者			
主 査 教 授 宮里 智恵			
審査委員 教 授 難波 博孝			
審査委員 教 授 児玉 真樹子			
審査委員 准教授 伊藤 優			
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、自己調整を促す学習を適用した家庭科授業モデルを開発し、授業実践により子どもの自己調整の過程を実証的に検討し、授業モデルの有効性と自己調整を促す要因を明らかにすることを目的としている。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>序章では、自己調整を促す学習の重要性について述べ、先行研究を検討して問題点を明確にし、本研究の目的と研究方法を述べている。</p> <p>第1章では、学校教育における自己調整を促す学習に関する課題を、先行研究や先行実践を分析することによって明らかにしている。</p> <p>第2章では、自己調整の観点から家庭科における問題点を先行研究及び先行授業実践の分析から明らかにし、家庭科に自己調整を促す学習を導入する意義および課題を提起している。</p> <p>第3章では、自己調整を促す学習を用いた家庭科の授業モデルを開発するために、中学生を対象に自己調整学習方略に関する調査を実施し、その実態を明らかにしている。その調査結果を踏まえて、授業開発における課題を提起している。</p> <p>第4章では、第3章の結果をもとに、中学生を対象とした家庭科における自己調整を促す学習を導入した授業モデルを構想し、授業を実践している。</p> <p>第5章では、第4章で構想した授業モデルを中学校家庭科において授業実践し、その学習過程における学習者の活動を記録・分析することによって、自己調整の習得過程について二つの観点から実証的に検討した。一つ目は、家庭科における調理実習授業に焦点をあてて、自己調整学習を援用した授業モデルを試案し、それを授業実践して実証的に検討している。二つ目は、自己調整学習を用いた家庭科における調理実習授業を実践し、特に授業前の自己調整方略得点が高い生徒の学習過程における他者とかかわりに着目して実証的に検討している。</p> <p>終章では、研究の総括として、研究成果と課題について述べている。自己調整の循環的段階モデルを援用して、中学生を対象に調理実習授業を実践した結果、各学習者は他者とかかわり合いながら学習する過程の中で、新しい気づきを得て、自分の考えの編み直しが行なわれ、</p>			

それが自己調整学習方略の習得につながることを示唆された。さらに、授業前の自己調整方略得点が低い生徒の学習過程における他者とのかかわりに着目すると、生徒が有する自己調整方略が異なる生徒間では、関わり方や自己内省段階における振り返りの内実が異なっていた。つまり、自己調整学習方略得点が高い生徒の協議への参加が、低得点生徒の学びに影響を与えることが示唆された。今後の課題として、自己調整学習方略得点異なる生徒間でのかかわり合いの実相の検討、生徒の班編成の在り方の検討、他者とかかわり合いによる生徒の考えの編み直しの実状と自己調整学習方略習得の関係についての実践的検証について言及している。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 中学生の自己調整方略の実態を調査で明らかにし、家庭科において育成すべき課題を提示したことである。
2. 自己調整フィードバックの循環的段階モデルを採用した家庭科授業「簡単な調理をしよう」を開発し、授業実践において有効性を実証できたことは、これまで十分に行えていなかった調理実習についてのモニタリングの機会や振り返りを共有する場面を設定することで、調理の現象の科学的認識につなげることができ、生徒の生活実践力を高めることに寄与できる。
3. 自己調整学習方略得点が高い生徒が協議に参加するか否かが、得点が低い生徒の学びに影響を与えていたことから、班編成の在り方によって、生徒の学びに影響を与えることが示唆されたことである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 6 年 2 月 13 日